

みん  
ぽく  
月刊

国立民族学博物館編集

2006  
2  
February

特集

産む

「未来へひらくミュージアム」

ミュージアムは『聲の森』



PRE PARTO

## 国家という名の「怪物」

● 加藤 九祚

アメリカは広島と長崎に原子爆弾を落とすまでしよう。それなのに、どうして日本はアメリカとそんなに仲よくするのですか」中央アジアの一国、タジキスタンの一学生から受けた質問である。私は言った。「世間の大人たちの関係、とりわけ国家間では『昨日の敵が今日の友』になるのはよくある話だよ」これが質問の返事にならないことは自分でもよく承知している。しかし、このようにはぐらかすしか手はない。たしかに日本とアメリカの密着度は尋常ではないほどすすんでいるようだ。靖国神社参拝と憲法改変にたいする執着度は、この密着度に正比例しているように思うのは私だけだろうか。過去六〇年間の平和がこの上なく尊く思われる。

中国の反日デモがウズベキスタンのテレビに伝えられたとき、ある若者が言った。

「中国もつまらないことをするものだ。日本から援助をもらっているのだから、そんなことをしないで黙っていろは、もっとももらえるのに」

うがったことを言うと思った。私は何もコメントできなかった。

人類史上、二〇世紀ほど新国家の誕生した時期はなかったのではないか。国家とは多くの場合「独立」と結びついている。そもそも、現代において「独立」は可能なのか。中央アジアでも一九九一年ソ連崩壊後、五つの独立国が誕生した。これらの国々でも、地下資源のある国とない国では、経済の格差が出ている。地上資源（水）があってもためである。地下資源（石油、ガス）でなければ国の利益にならない。中央アジアの一国、トルクメニスタン（人口約五〇〇万）では地下資源が豊富で、電気、水道、ガス、塩は無料、ガソリンは一ドルで六〇リッター、ウオツカも自国産、外国産を問わず安い。ただしシヤゾフ大統領にたいする個人崇拜は群を抜いている。貨幣にも町にも彼の肖像があふれている。

各国とも愛国心の鼓吹はさかんである。人はみな「誰か故郷を思わざる」であると思うが、その上になお、「これでもか」の鼓吹である。



イラストレーション：栗岡奈美恵

二一世紀もまた、国家という名の「怪物」が人びとの意識と生活を支配しつづけることであらう。

かとう きゅうぞう／国立民族学博物館名誉教授。1922年、韓国慶尚北道生まれ。上智大学文学部卒業。陸軍工兵少尉。戦後4年8か月シベリア抑留。学術博士。1998年からウズベキスタンで仏教遺跡を発掘中。

## 目次

## CONTENTS

- エッセイ 世界へ世界から
- 01 国家という名の「怪物」  
加藤九祚
- 02 特集 産む  
産むこと・生まれること  
松岡悦子  
死と再生の物語  
中村和恵  
胎児・胚・卵をめぐる科学に  
文化の知を  
齋藤有紀子  
フィールドから  
ファティマのお産  
井家晴子  
「他の人を娶ってください」  
松尾瑞穂  
立ち入れなかった世界  
田村克己  
お産を見守る人びと  
家族にやさしいお産  
北島博之  
助産師の出番を  
日隈ふみ子  
女の戦いからイベントへ  
宮崎亮一郎
- 10 未来へひらくミュージアム  
ミュージアムは『聲の森』  
西 洋子
- 13 表紙モノ語り  
ヒョウタンから「おぎゃあ!」
- 14 みんなくインフォメーション  
友の会とミュージアム・ショップからのご案内
- 16 万国津々浦々  
プーケットは元氣  
市野澤潤平  
人生は決まり文句で  
奥様、お手をどうぞ  
新免光比呂
- 17 手習い塾  
エチオピア文字で名前を書く①  
柘植洋一
- 20 生きもの博物館  
ワカメ漁場と海女の暮らし  
李 善愛
- 22 見ごろ・食べごろ人類学  
モントリオールの酔いどれ天使  
岸上伸啓
- 24 公開講演会  
世界の伝統芸能・最前線  
次号予告・編集後記

# 産む

産む、産まない、産めない、産ませる、産むかもしれない……。医療が発達し、種の保存が多様化すると同時に家族が核化し、個人の選択肢が増えた。少子化といわれる時代に生殖の問題は、個人個人、特に女性にふりかかっている。共同体が築いてきた「産む」をめぐる文化と、科学の進歩と、個人・家族のかかわり方について考える。



カナダの乳児用モカシン  
(標本番号H75079)



ペルーの土人形 (標本番号H210110)

弘法大師の御母公を祀った慈尊院  
(和歌山県九度山町)。女人高野ともよばれ、安産、子授けを祈って乳型と絵馬が奉納されている



## 産むこと・生まれること

松岡悦子

(まろおかつこ)

旭川医科大学助教授

「あなたはどんなふうにご世に生まれましたか」と聞かれても自分がどうやって生まれてきたか思い出せる人はいないと思う(たぶん)。今生きている私たちはみんな、この世への境界を越えて

生まれてきた。文化人類学(民族学)では、産むこと、生まれることを通過儀礼ととらえている。産む人は出産によって母の地位へと移行し、生まれる子どもはあの世の存在からこの世の存在へ、

すなわち名もない存在から共同体の新たな仲間へと変身を遂げる。民俗学では、お産を介助するトリアゲバアサンが取りあげるのは、あの世からやってきた魂だとされていたし、北海道に住むア

イスのシャーマン兼産婆は、誕生と死の両方の場面によはれて、魂がこの世とあの世の境界を越えるのを見届けた。こんなふうには、どの文化でも出産は生と死の両方にまたがる危険なときとされて、

出産前後にはいくつもの儀礼やタブーが用意され、共同体の人びとは力を合わせてこの変化のときを乗り切ろうとしてきた。

子どもがどうやって生まれるのかという民俗生殖観はさまざまだ。卵子と精子が受精して子どもができるという科学的な生殖観は、体外受精や顕微授精などの生殖技術を生み出した。ところが科学的知識が行き渡った社会ほど不妊の人が増え、そんな知識をもたない社会ほど簡単に子どもができるのは何とも奇妙なことだ。と南米アソンのヤノミ族を研究する人類学者のガブリエルはいった。生殖の知識が子どもを作るわけではないのだ。

産むことには、生物学と文化の両方がかかわる。女性の体から赤ん坊が生まれるのは、今までのところ世界共通のことだが、その女性がどこで、どんな格好で、誰に介助され、どんな道具を用いて出産し、産後どんな過ごし方をするのかは文化によって異なる。たとえば先進国の多くで、いまタミープルーや産後うつ病が話題になっているが、生理的には同じ出産のプロセスなのに、そんなことはなかった存在しない社会もある。体は同じ生理的プロセスを経て赤ん坊を産み出し、女性の出産の経験は文化的に形作られていることになる。さて、目下の出産の話題のひとつは高い帝王切開率だ。少し前までアメリカの帝王切開率は四人に一人、高いといわれていた。でも今高さを誇っているのは、



帝王切開の後、母子の絆が深まるように、お母さんに赤ちゃんを見せる。ハンガリー

中国や韓国やベトナムなどの少し前まで途上国といわれた国々だ。韓国の農村部で四六、八パーセント、全国平均で三七・八パーセント(二〇〇〇年)、中国の南寧のふたつの病院ではいずれも約半分が帝王切開だった(二〇〇五年)。中国では、帝王切開の方が安全でよい分娩と考える女性が多いらしい。ヨーロッパでは、帝王切開は大切な性を傷めない出産法として、セレブや女性産科医に選ばれている。



自宅の土間のごさの上で、赤ちゃんがするりと誕生した。バングラデシュ

会では、育児は前人未踏の困難な仕事になっている。なぜそうなるのでしょうかは謎だ。これまでどこにも当たり前のようであった水や空気が、今では貴重な

資源になりつつあるように、これまで問題化されることのなかった、産むこと、生まれることや子どもを育てることが稀少価値になりつつあるのだろうか。



ジャワ島の伝統的産婆ドクンは、日に2回産婦の家に来て、赤ん坊に沐浴とマッサージをおこない、その後スワッドリングをする(布で体をぐるぐる巻きにする)。そうすることで、赤ん坊の体を文化的なものに作り上げていく



同じ病院で産んだお母さんたちが、その後も集まって子育て仲間を作っている。ドイツ



バングラデシュのタイとよばれる伝統的産婆。産後の区切りをつける儀礼に招待され、取りあげた子どもを抱いて、満足そうタイ

# 死と再生の物語

現代に生きる禁忌と呪詛

中村 和恵

(かむら かずこ)

明治大学助教授

オーストラリア北端、アラフラ湿原に臨む中央アーネムランドの先住民コミュニティ・ミラミギンで、昨年一〇月、画家ピーター・ミングルの話を聞いた。アート・センターの庇に飾られた彼の絵の下でピーターの解説を聞くのは、じつは二度目だ。四匹のウイイチとよばれる大ヘビの間に、双頭のヘビ形がふたつ平行に並ぶ絵。だが今回、以前はいわなかったことをピーターは語りだした。ヘビの間にあるのは「あれはミルクイウイなんだ」という。「天の川だから、魚が流れているんだ」。

者に不用意に公開されるべきではないとされており、出版や展示の現場で問題化する。ことも少なくない。「秘密」の多くは何らかの意味で、生殖活動を含む死と再生の事象にかかわっている。どうやらピーター・ミングルの絵、物語の「内側」は相当に深遠である。私はやはりその一端を伝えてもらったにすぎない。

多くの文化において「産む」ことは、数々の禁忌や呪詛と結びついている。古くからそうであり、じつは現在もそうである。最近の少子化をめぐる議論にも、論理的分析だけでは理解しきれない側面がある。産まない女、女しか産まない女を罵る日本のことは、暗く恐ろしい。石女、女腹、地獄腹。その一方で、多胎や多産の女を貶す畜生腹という語もある。産まない女、許されぬ出産を描いた物語なら、世界中、牧拳に暇がない。典型的なのはスインのフェリコ・ガルシア・ロルカの戯曲「イエルマ」だろう。子どもを望まない、おそろくつくれない夫に、子どもがほしくて気も狂い、そう、でもほかの男と逃げることはできない、囚禁に縛られた女。南アフリカのロレッタ・ツボの小説「でも彼らは死ななかつた」(邦訳題「女たちの絆」)は、もっと具体的かつ政治的である。アバルトハイ



ピーター・ミングルと彼の作品(屋根裏の2枚のうち右側)



掲載許可: ピーター・ミングル、ベリンダ・スコット (Bula'bula Arts Aboriginal Cooperation)

ウイイチは、この地域の物語としてよく知られるワキラク姉妹の話に登場する。水場やつぎきた姉妹の一人が出産。月経とも血で水を汚し、怒ったヘビは彼女らを飲みこむ。その声は雷、舌は稲妻、そして雨が降る。ヘビは天から落ち、姉妹と子を吐き出し、また飲みこみ、水に戻っていく。飲みこみと吐き出し、雨の開始と停止、死と再生。再生する魂は、魚の姿をしているという。この世から離れていた魚、魂は捕まえられ、また放たれて、新しい生命が誕生する。

今や「現代」美術として世界的に評価されるアポリジナル・アートだが、ある種の絵の「内側」(深層)の意味は部外

ト政策下で夫と一年に一度しか会えず、子どもができてくなくて姑にいびられる妻。やつてくても待っているのは貧困と迫害、さらに白人による強姦と混血児の出産、村八分だ。映画「クジラの島の少女」の原作である三ージランドのマオリ作家ウイイチ・イヒマエラの小説では、双子の出産に際し、男の子のほうが死んでしまい、女の子が生き残る。祖父であるマオリの首長は嘆息悲しむ。女では後継者になれないからだ。逆の例もある。双子を忌避する北オーストラリア・ティウイ島の人びとは、男女の双子なら女を残すという。

現代日本ではこうした「迷信」は薄れているように見える。能力の高低や障害の有無、また性別を問わず、生まれた子どもは尊重されるべきであるし、生殖行為が暴力や強制によつてなされても妨げられていけない、結婚や出産経験の有無を問わず女性の人権は守られなくてはならない——こうした原則に多くの方は賛同されるだろう。ただ、どうやらあくまで原則としてである。人間という生き物は、じつはかなり非合理的だ。「産む」をめぐる禁忌と呪詛がまったく消失するほどに合理的な社会というものは、おそらくない。死と再生の謎は、

いかに科学が進歩しても、いや進歩するにつれ、むしろ深まっている。

問誕生を規制する法律が論じられていく。同時に、記憶の彼方から続く死と再生の謎への畏怖も、私たちのなかにま

の現場には、最新医療技術、個人の希望や家族の理想、それらすべてを可能に

巻いている。これは科学的理性だけで解き明かせる領域ではない。「物語」は深く長く、私たちに影響を及ぼしつつ

## 胎児・胚・卵をめぐる科学に文化の知を

齋藤 有紀子

(いとう ゆきこ)

北里大学助教授

「子ども」の胎衣、入手いたしました。このすばらしい自然の産物が、それを所持して陸海を旅する人びとを一切の災難事故から守ってくれる驚くべき効果については、すでに多くの人がひとが体験済みで、世界中から絶賛されております」(一八二〇年三月九日タイムズ広告、中沢新一「精霊の王」より)

一九世紀のイギリスでは、胎児を包む膜である胎衣を、頭にかぶせて生まれ

にも、胎衣をめぐる言い伝えや風習は多くある。生命の誕生と、その附属物、副産物に、私たちの社会は、さまざまな意味や価値や用途を見だし、畏怖や敬意を抱きながら、歴史をつづけてき

た。しかし今、そのような文脈と接点をもたないまま、新しい医療技術が、ヒトの胎盤や生殖細胞、中絶後の胎児に実用的価値を見だし、リサイクルを試みはじめています。

卵や卵巣(不妊治療や婦人科手術で摘出され、廃棄予定のもの)など、これらを提供・入手するために必要なのは「新聞広告」ではなく、提供者による同意(インフォームド・コンセント)であり、細胞は売りに出されるのでなく、無償提供だ。

親も問われることになるだろう。個人と社会の意識の深層に有形無形に影響を及ぼすこれらへの検証なくして、日本の「幹細胞研究」のあり方を見極めるのは、難しいのではないだろうか。



枚方市百済寺遺跡から出土した奈良時代の茶壺形土器。内部には和同開珎数枚とともに胎盤の痕跡と考えられる有機物が残っていた。後産(胎盤)を埋葬する習俗は古く、広く分布していたが、奈良時代の日本にも胎盤を埋葬する習俗があったことが確認できる。写真提供:枚方市教育委員会

# ファティマのお産——モロッコ・ベルベル人の村より

井家 晴子 (いのえ はるこ) 東京大学大学院総合文化研究科・日本学術振興会特別研究員

村の無料診療所の看護師がいった臨月から二週間過ぎて、ファティマに出産のきざしは見られなかった。ファティマは長びく妊娠にそれほど恐れる様子はない。そして、今回の妊娠期間や腰痛の感じ方が今までの四人の娘たちとは違うことを私に告げ、無事に生まれればどちらだつていいけれど、男の子なのかもしれないとうれしそうにいった。

村の女性たちは、ファティマのなかなか生まれない子どもが、じつはムクワン(胎児が妊娠初期に胎内で成長を止めて眠るという信仰)になつていたのでないかと噂をこぼした。そして三週目も過ぎ、みんなが忘れたころ、ファティマは出産したのである。

お産の場には、レコからか噂を聞きつけた女たちが集まってきた。彼女たちはお茶を飲み、自分たちの体験や見聞

きた出産の話題に花を咲かせながら陣痛に苦しむファティマを励まし、伝統的出産助産者ウツダにあれこれアドバイスをやる。ファティマは、にきわ女たちち自分が今必要としているのは笑いではないと怒り、女たちはそんなファティマをおもしろがった。

ファティマは、いきまはじめてから半時間ほどで出産した。女たちは、赤ん坊の性別を知ろうとファティマの足元に集まった。「女でも男でもどちらでもいいじゃないの」。ウツダは、のぞきこんだ女たちを制して言った。だれも今見た赤ん坊の性別を言おうとはしない。ファティマの目に涙があふれる。女たちは、今度は女児のよき、男児のつまらなさについて話をにぎわせばいい。

出産を外で待つていた夫が部屋に入ってきた。女たちは口々に祝福のことは

贈る。夫は生まれた子を抱き上げた。「この子は五人いる私の娘のなかでいちばん美しいじゃないか」  
夫が出て行った後、ファティマはため息をつき、母が用意した、魔術(イムクラール)を解くクドワランとよばれる黒い液と草刈鎌を眺めていた。「まだ産むつもりなのか」「女でも男でもどちらで

\* 人びとの日常生活から「魔術(イムクラール)」は切り離せない。イムクラールとは単なる魔術「スフル」だけでなく、妬みを含んだ魔術全般を指している。何かよくないことが起こると、人びとは誰かに生まれ魔術をかけられたためだと考え、イムクラールを解くためにさまざまな方法を試みる。ファティマに関しては、結婚できない女性、あるいは子どものいない女性やそいつの女性の母親から妬みをかい、女ばかり産むイムクラールをかけたかと考えていた。



伝統的出産助産者。出産経験の豊富な年長者が多い



赤ちゃんは半日以上、糞虫のようにくまれて過ごす

# 「他の人を娶ってください」——インド農村部の複婚

松尾 瑞穂 (まつおみずほ) 総合研究大学院大学文化科学研究科

「私が両親と相談して決めたのよ、妹と夫を結婚させようつてね」

びとはとても手が届かない。かつては父系親族内での養子縁組もみられたが、家族計画の普及で子どもはみんな一人か二人。そもそも養子にもらえるような子どもがいないのだ。

そんな夫婦としての解決法は、夫がもう一人、妻を娶ること。一夫一妻が決まりで、結婚が聖なるものとされる

結婚して一五年たつても子どもがでなかつたラクタさんは、一〇歳以上の子

ヒンドゥー社会では、法律でも複婚は禁止されている。しかし、子どもができない夫婦に対しては、公ではないにしても「仕方がない」と共同体でゆるやかに認められている。二人目、三人目の妻であっても「結婚」といい、決して俗にいうお妾さん、というわけでもない。通常は子どもができないことにしづれを切ら

離れた末の妹を夫に嫁がせて、今は三人で暮らしている。体外受精を含む生

した夫側が、ほかの女性を連れてくることが多い。結婚が聖なるものである以上、妻としては離婚だけは何としても避けたいし、そのためならば夫に「他の人を娶ってください」と自らもちかけることもある。子どもができないことは「女性の責任」だとして、夫も姑もそれを当然と受け止めて、自分から言ひ出さない妻に周囲の女性たちは「あんたも強情ねえ、旦那に結婚させなさいよ」と口出しをする。それで体調を崩し、痩せていく女性たちには私も何人も会った。しかし当の女性たちも意外としたたかである。既に六〇歳を超えているマラさんなどは、以前、出身村から知的障害のある女性を連れてきて夫に娶らせたことがある。このような場合は、子ども

ができた後妻に追い出される心配はなく、自分が第一妻として君臨することができる。しかし、長い目でみると、このような婚姻形態は持続的な「家族」を形成するものではなさそうである。多くの場合は、どちらか一方が婚家を去つていたり、別居したりして、最終的には一夫一妻に落ち着くようだ。このあたりが、必要に迫られて場当たり的におこなわれているヒンドゥー社会の複婚の不安定さを示しているのだろう。ラクタさんの妹は妊娠した。「子どもは私たちのもの。これからは私が二人を守る」と、妹の競争相手ではなく保護者としてふるまうことを選んだラクタさんの「家族」がどのような軌跡をたどるのか、見守りたい。



村の病院でたつた今生まれたばかりの赤ん坊。へその緒を切つてから、ぬるま湯で全身を洗う



都市の不妊症クリニックにて。村の人も都市まで出て検査はするが、高額な不妊治療が続かず途中で断念することが多い

# 立ち入れなかつた世界——ビルマの農村

田村 克己 (たむら かつひ) 民族社会研究部

若いころの「失敗」である。

ビルマ(現ミャンマー)の農村でフィールドワークをおこなっていたある朝、起きて向かいの家を見ると、高床式家屋の床下のところに、竹を編んだものが張りめぐらされており、村の産婆がなかに入っているという。産婦の夫は、いささか所在なげに、落ち着きなく家まわりの仕事をしていた。そうこうするうちに、近

所の男性が私のもとに駆け寄ってきて時計をもった私に今の時刻を尋ね、答えるときまた飛ぶように引き返していった。ビルマでは子どもが誕生すると出生票ともいふべきものが作られる。ヤシの葉を乾燥したもの、名前や生まれた年月日、何時何分何秒かまでが刻んで記されており、人生の節目の大切な儀式を受けるときなど、それをもとにも

つとも吉兆の時が占われる。

時刻を尋ねた件の男が、私に「なかに入つて見るか」といつてくれたのに、私は「いや」と答えてしまった。思い返すに調査の貴重な機会を逃したようである。残念である。そのとき、ビルマでは出産が不浄なものだとされ、関わると男性の生来もつ徳を減らすことになるといわれていることが頭に浮かんだのは事実である。



ビルマの母神像。「西の御母堂」の名をもち、出産を司り、母子を守る(標本番号H210099)

ある。だが、それ以上に、どのような態度で生命の誕生という事態に臨めばよいのか、三〇代前半の私にはわからなかつた。あれから四半世紀たち、私は年をとった。しかし、今同じ状況になったとしても、どのような態度がとれるであろうか。私には自信がない。

# ミュージアムは『聲の森』

西 洋子

(にしひろこ)

東洋英和女学院大学教授



「ダンスで出会う・ダンスでつながる」ワークショップ参加者

昨年11月、民博で開催された  
公開ワークショップ「ダンスで出会う・ダンスでつながる」。  
モノたちの声が響き合う展示会場で得たイメージを創作ダンスで表現した。  
障害のある人やない人、女性や男性、子どもや大人、  
ずっと踊ってきた人や初めてダンスをする人……。  
さまざまな個性をもつ人びとが集まり、ともに創り、ともに踊った2日間。  
未来のユニヴァーサル社会の  
ヒントを秘めた活動を紹介する。

未来へひらく  
ミュージアム

## 楽しい予感

ミュージアムにでかけるとき、あなたは何を期待しますか。怖いくらいに静かで、ちょっと薄暗い館内には、ライトに照らし出され行儀よく並んだモノたちが待っています。こうしたモノとの出会いには、ときにとっても鮮烈です。目にする形の不思議さや色の鮮やかさ。そこから過去の知識や経験が喚起され、ミュージアムで新たに得た情報も加わって、私たちは遠い世界の人びとの営みやその歴史、見たこともない、想像さでできなかつた風景に思い馳せませす。

モノを通して自分や世界と向き合うという、知的で静かな作業をおこなうミュージアムという空間と、感性をフルに発揮し、ダイナミックにからだで創造し表現するダンスが出会ったら、そこには何が生まれるのでしょうか。しかも、その場に集う人びとが、とても個性的だつたら。つまりは、ワイワイ、がやがや、バラバラ、こたごたの状況のなかからどんなできことが浮かび上がってくるのか。いえない、こうした出会いと状況だからこそ、おもしろいコトが起こりそうな楽しい予感がするのです。

## ワークショップに響く声

公開ワークショップ「ダンスで出会う・ダンスでつながる」は、ミュージアムにとってももちろん、ダンスにとっても、とても刺激的で実験的な試みでした。

一風変わった今回のワークショップ。館

内のいろいろなモノたちからは、さまざまな声が開いてくるかのようにです。まさに、「ミュージアムは『聲の森』」です。まずは、参加者を迎える入り口あたりの声に、耳を傾けてみることにしましょう。

## モノの声 いろんな足がやってきた

今日のお客は本当ににぎやかだ。もうすでにふたつのグループが通りすぎていった。今度のグループは、まだ遠くのようにだから声は聞こえないけれど、響いてくる足音の、何とまあ雑多なこと。全部で二〇人くらいかな。大きい足、小さい足、ハイヒールもスニーカーも革靴もある。おと、車いすの車輪が頭の上を一瞬で走り去った。その後ろからはゆつくりと、ベビーカー。どちらも似たような感触だ。

いろんな足の間から見上げれば、おじさんは肩をまわし、女の子は腕をぐにやぐにやせて踊っている。肘と手つながらの女性たちは、ゆつたりと談笑しながら優雅に過ぎていく。

何だかいつもと様子が違う。ミュージアムの入り口では、誰もがちょっと緊張するはずなのに。随分とリラックスしたからだや空気。そう、お風呂あがりのような。直前まで、みんな遊んでいたような。いったいこの人たちが、なんだろ。

## 出会いのためのウォームアップ

ワークショップの参加者、約五〇名は、



カナダ・イヌイトの石製彫刻(標本番号H212671)



展示を見ながらあわす。からだがい出す

「音」「形」「色」の三つのグループにわかれて、まずは、人やモノに出会うためのウォームアップをおこないました。自己紹介をしたり、よび名を名札に書いたりと、言葉の世界で他者と出会うと同時に、ちょっとした動きを通して、からだの世界での出会いも試してみたいのです。初めて出会ったパートナーの背骨あたりを上から下へ、下から上へと、思い思いのリズムでとんと叩くと、相手は「あ、あああ、あ」や「ほ、ほ、ほ、ほ、ほ」と音声で返してくれます。向かい合つて手とり、相手の腕を好きなように動かしてみると「タコみた、やな」とか、「肩こりが楽になるよ」とか、いろんな声が聞こえてきます。最初は少しははずかしそう。でも笑顔、時々大爆笑。からだの心が温まり、つながりが柔らかならたら、さあ、モノたちに会いにでかけましょう。

このワークショップの参加者は、さまざまなからだのもち主です。子どもや大人、車いすに乗る人や、車いすではない人。女性や男性、目でみて知る人や、からだでさわって知る人。さまざまなからだだが、それぞれのやり方でミュージアムのモノたちとかわります。説明を聞いたり、解説を読んだり、普通のミュージアム鑑賞と同じです。それに加えて、手や頬でさわったり、顔やからだで形を真似たり、声をだしたり、動きに置き換えたりと、自分のからだでモノと出会い、そのイメージを、自分の内側に取り込んでいきます。それぞれの状況に合った、自由なやり方で構わないのです。

一方で、決まっていることもあります。それは、展示場をまわった後には、グループの仲間とからだでの表現活動をはじめ、二日目はミュージアムのエントランスホールで発表するという事です。発表までの活動時間は約四時間。とても短い時間です。ですから参加者は、楽しいけれど、ちょっと大変でもありますが、もつとゆつくり、じつくり見たい、さ



色の世界を知り、色をからだであらわす



アフリカのビーズの首飾りのいろいろな色のイメージを形であらわす

わりたい、つくりたい。ホントそうです  
ね。次回は必ずそうしましょう。  
さて、いよいよ「形」グループが展示  
場に入っていくようです。ミュージアムの  
モノたちからは、どんな声が響いてくる  
のでしょうか。

### テーマにもとづく展示の鑑賞

#### モノの声 からだでみる

こちらをじっと見ていたかと思うと、  
ぼくと同じ顔をつくるんだ。目も口も  
斜めになっているほどの顔。ゆがんだこ  
ころを見透かすようでしょう。そうか  
と思うと、次は隣の奴の真似をしてい  
る。口をタコみたいにすぼめて、ひよ  
うきんな表情だなあ。「ほっ、ほっ、ほっ」と  
と妙な声までだしはじめた。その声に  
合わせて、おなかを揺らしている。何だ、



アフリカのマコンデ族の木彫像(標本番号H7113)



人間ピラミッド「てっぺんがぼく」

顔は、こっちに向けてね。みんな、ど  
かがつなごっている感じだったよ」「日先  
生、ぼくの頭をさわってね、そう」「ふ  
むむ、こんな感じだったね、これはやっ  
ぱり家族づてことかな」  
「そしたら最後は……」「人間ピラミ  
ッドが、サバナの木にかわつていくのは  
どう」「木が揺れて、そこから人びとが、  
自分の好きな方向に向かって歩き出す、  
ゆつくりと」「あら、すごく素敵な表現

### ワークショップ作品『聲の森』

こうして参加者は、モノたちの背後に  
ある奥深い世界と出会うことで、それ  
ぞれのからだの内側に豊かなイメージを  
芽生えさせました。それを創造の源と  
して、さらに仲間と声を交わしながら、  
自分たちの表現へと練り上げていったの  
です。そして二日には、ワークショップ  
作品『聲の森』と題して、三グループが  
共同でひとつの作品を発表しました。パ  
フォーマンスの場所は、ミュージアムのエン

こいつは、

「顔を動かすすぎて疲れた」、そんな  
こというなよ。ぼくらはもう何十年も  
ここで静かにしているんだ(その方がず  
つと疲れるよ。それにしても、こうし  
て真似してもらおうと、同じ壁に並ぶ仲間  
は個性的だなあ。その男の子、たく  
さん見せてくれてありがとう。今度は  
仲間同士が向き合って、世間話でもで  
きる気楽な展示がいいな。ところで君  
の乗り物は何か? お返しに、大きなタイ  
ヤを真似したいけれど、ぼくは壁から  
離れられないからねえ。

#### モノの声 さわって知る

「このテーマホールは、親子の熊と  
蛙……」。ふー、今日も、おさまりの説  
明がはじまったわ。どうせみんなで上を  
見上げて「大きい」と言うだけでし

トランスホール。長い階段には、たくさ  
んのお客さまが集まって、とてもにぎや  
かなパフォーマンスになりました。ミュー  
ジウムを取り巻く木々や、すぐそばの  
水辺の景色に、今ではすっかりうちと  
けた参加者の生き生きとした表情と動  
きが、くっきりと浮かび上がりました。  
どんなダンスに仕上がったのか。そ  
れはもういろいろで、楽しすぎて、

パフォーマンスを観てくださったお客さ  
まには、ワークショップの参加者とミュー  
ジウムのモノたちが「ダンスで出会い、  
ダンスでつながる」プロセスが伝わった  
でしょうか。それとも、まったく新しい、  
独自の表現として受け取られたのでし  
ょうか。見る人の心の動きまでは、わか  
りません。それでも、さまざまな声を  
響かせるモノたちと、そこから生まれた  
新たな表現とが、一緒に展示されてい  
るような、そんな未来のミュージアムが  
あったなら、とても素晴らしいと思いま  
せんか。

よう。

「……とされていますが、本当はよく  
わからないんです」「へー!!」  
どうしてここで感心するのよ。もしか  
してこの子、わからないということがお  
もしろいかな、オモロイナ。

あれ、誰かが私をゆつくりさわって  
いる。「蛙の尻尾ね」。そうそう、私は尻  
尾なの。親子熊の下にいる私に気づい  
てくれるなんて。丁寧にさわってもらっ  
て、あつたかくなってきた。あらら、ほっ  
べまで寄せて。ふんわかいい気分。故  
郷の匂いを伝えられるといいけれど(防  
虫剤の匂いだわ、なんていわれたらどう  
しましょう)。

さっきのオモロイ子が「おばさんのこ  
先祖様はシャケなの、ぼくは上の熊がい  
い。爪がスゲーから」と指を爪の形にひ  
らいている。二階の熊親子も、爪形の手  
でさわってもらえればいいのに。でも、い  
つだって私の上にいるから無理よね。突  
つ立っている私たちが、ゆつくりと横に  
寝そべれば、自分の祖先を心に描く人  
びとと、大きさ比べができて楽しいかな。  
勝つのは決まってる私たちだけだね。何と  
いっても、こ先祖様だからねえ。

モノたちのこんな声に出会いながら、  
各グループは、展示鑑賞を終えました。  
そして今度は、動きながら、自分のか  
らだが発する声を、仲間と交わしてい  
くようです。

### イメージをからだで表現する

「アフリカの成人式のスカートのように

ふくらんで動きましょう」「あーあのワ  
ラっばいやつね、がささそつて」  
「今度は木彫像の人間ピラミッド」「横  
に長くつなごって、次は縦にのびてい  
うか。I君の車いすの上に日ちゃんに乗  
つて、一番軽いK君、このおじさんの肩の  
上にあがつてみたら……」「おー高しぞ。  
てっぺんのおじさんになった気分」  
「ちがうちがう、あつちからも、こつち  
からも顔がでてたよ。だからおばさんの



アメリカ展示場の仮面にインスピレーションを得て、仮面の思いをからだに取り込む

### 表紙モノ語り

## ヒョウタンから「おぎゃあ!」

(標本番号H210155、高さ22cm 幅14cm 奥行14cm)

● 雄二  
関 雄二  
研究戦略センター



南米アンデス地帯は、原産地  
だけあって、文様を施したヒョウ  
タンは、じつに四五〇〇年も前  
から知られている。その後、ヒョ  
ウタンは漁網につける浮きとし  
ても利用されたが、一九世紀に  
なつてから、この作品のように民  
衆芸術作品の素材として注目さ  
れ、また観光土産として流通す  
るようになる。乾燥させたヒョ  
ウタンの表面を磨き、下絵に彫  
刻刀で刻みを入れ、地の明褐色

と芯の白い部分、そして燃えさ  
しをあて、焦がしてできる黒色  
部分とを対比させ、祭りや日常  
生活などさまざまな場面を表  
現する。技術こそ単純だが、描  
く図案は緻密である。

表紙写真では、ベッドに横た  
わる農民女性の出産前の場面が  
描かれている。しかし周囲にはア  
ンデスの儀礼的要素もちらほめ  
られている。まずは、腹をさわっ  
ている夫らしき人物の傍らに立

ここに掲げた写真は、裏面の  
出産後の場面。いずれも上部に  
は、トウモロコシの醸造酒である  
チチャを保存するための壺が見  
える。チチャ酒も、アンデスの祭  
りや儀礼に不可欠な存在である。  
めでたいときに酒、というのは、  
どこでも変わらぬ習慣らしい。

用具とともに布の上にはげられ、  
含んだり、他の  
足下に広げた  
布には、乾燥さ  
せたココ(ココ  
ノキ科の植物)  
の葉が見える。  
コカの葉はアン  
デスの儀礼には  
欠かせず、口に

# プーケットは元気 —インド洋大津波と風評災害

市野澤 潤平 (いちのさわ じゅんぺい) 東京大学大学院総合文化研究科



津波の直撃を受けて閉鎖中の建物の前には早々に露店が出現

〇〇四年二月二十六日にインド洋沿岸を襲った大津波は、合計三〇万人を超す犠牲者を出した。タイにおいても、特にアンタマン海側の南部六県が津波の直撃を受け、数万人が被災した。そうした事態を受け、津波の被害と復興の課題を探るべく、世界中から多数の研究者が被災地入りした。ボランティアの申し出や寄付金も、続々と集まった。

当時、私は日本で被災状況の報道を追っていた。津波襲来の直後、正月休みのためか日本のマスコミの動きは鈍かったが、年明けになってようやく詳しく情報が伝えられるようになって、被害の深刻さに驚かされるばかりだった。テレビ

## タ

ニューズでは連日、まるでマッチ箱のように津波に押し流される建造物の映像が、繰り返し放映される。その多くが、観光客が偶然ビデオカメラに収めたものだったため、観光地が被災したタイ南部の映像が必然的に目立つことになった。タイ観光の研究者の端くれである私は、つい数カ月前に訪れたこともあそこも、流されて無くなってしまった、と目を疑うばかりだった。

タイ南部の被災地は、国際的に有名なビーチリゾートの、プーケット島、ビビ島、カオラックを含む。日本人にとっても、プーケットはバリと並ぶアジア・リゾートの定番で、ビビ島はかのレオナルド・ディカプリオ主演の映画「ザ・ビーチ」の舞台としてなじみが深い。二月の後半になって、私はそれらの被災地を視察に行くことになった。国立民族学博物館による研究の一環である。実際に足を踏み入れてみると、ビビ島とカオラックは確かに建物があらかた破壊されていて被害が甚大なのだが、タイ南部最大の観光地であるプーケットのバトンビーチにやってくる、逆の意味で驚いた。日本でニューズ映像を見ていた印象とはまったく異なり、ホテルも土産物屋も通常通り営業していたからだ。津波の爪痕がないといえは嘘になり、海岸沿いの一部のホテルや商店は閉鎖されているものの、ビーチリゾートとしては大きな問題なく機能している。そのわりには、人影がまばらなのが寂しかった。



ハイシーズンにもかかわらずビーチには人影がまばら

てこない。バトンビーチ全体が観光客に頼っているだけに、これは死活問題だ。地域のイメージが悪化して、観光客に敬遠される「風評災害」。何とかプーケットは元気だということをも日本のみなさんにも訴えたいと、住民たちは口をそろえる。しかし、マスコミ報道は被害の悲惨さはかりを強調し、続々と訪れる学術関係者もプーケットは素通りして、近隣の壊滅した漁村や被災者キャンピングへ行ってしまう。その方が集める報告ができるからだ。物理的な被害だけが災害ではない。経済の落ちこみなど、災害の二次被害は、ときに大きなダメージを地域社会に与え、しかも対策を立てるのが難しい。物理的な一次被害のインパクトの陰に隠れがちで、二次被害の問題に目を向けることの必要性を、痛感させられた。

# 奥様、お手をどうぞ

新免 光比呂 (しんめん みつろ)

民族文化研究部

## ど

この国では作法とか敬語とか、いまでも忘れられて久しい。もし、まだあるとすれば、どこの町のお稽古事の集まりのなかだけではないかと思われるほどだ。ところが、ヨーロッパの東の果てに過去の作法から生まれた言葉が日常生活のなかに、まったりと息づいている地域がある。

男性が女性に挨拶をするとき、優雅に腰をかがめ、そと両手で女性の手を取って口づけをする。そのとが、*‘Sarut mana’* (サルート・マナー、だが私には、いつもサラムナーと聞きえた) という。意味は、お手にキスを、である。これは、男性が女性に挨拶するときだけに用いられる。ふつうは、手にキスをするしぐさより、頬へのキスの場合が多いのだが。

挨拶である以上、この身体行為は習慣化していて、その意味を問いただす人はいない。だが、この *‘Sarut mana’* という挨拶は、外国人である筆者がルーマニア滞在中、なかなか身に付けないとができた。言葉であった。ところが難しかったのか、*‘Sarut mana’* という言葉で挨拶するだけなら、「ごんには」に当たるルーマニア語の *Buna ziua*、またフランス語の *Bonjour* やイタリア語の *Buon giorno* と同じである。たし、それが頬へのキスや抱擁をとまなくても心理的な抵抗はない。だが、*‘Sarut mana’* にはちょっと違う語感がある。あの優雅



男女のかかわりはさまざま。踊りにエロスが表現されることもあるが、ルーマニアの踊りでは、男性のアクロバティックな動きと女性の控えめな動きが目立つ

なしぐさが脳裏に焼きついていて、照れくさい気分を生んでしまうのだ。時代錯誤も甚だしい社交儀礼の名残りではないか。ときおり、優雅に女性の手を取り、サラムナーとのたまう、しゃれた紳士をみかけるのでなおさらである。

## こ

こで疑問が生じる。なぜ、東南ヨーロッパのルーマニアで、ヨーロッパ中世の封建的礼儀作法が今でも見られるのか。

その答えは、ルーマニアとヨーロッパの密接な歴史的關係のなかに見出される。現在はルーマニアの一地方であるトランシルヴァニア地方は、近世初頭からハプスブルグ帝国の支配下にあった。近代には、と帝国に対する独立運動の過程で、フランスから民族解放の思想的な影響はかりでなく文化的影響を強く受けた。さらに独立後には新しく国王をドイツからよび寄せた。これ

がルーマニア王室のはじまり。王族の首を切ったフランスの影響を受けながらも、ドイツから王家をかりてくるというのがルーマニアらしくてよい。そして、宮廷貴族や地主の子弟が西欧のマナーを取り入れて、悦にいついたのである。

ちなみに社会主義体制下でも、*‘Sarut mana’* は生き残っていた。男女同権、労働者の権利を声高に叫びながら女性もあり方は、旧体制とあまりかわらなかつたとみえる。現在のルーマニアでも、男性に対する女性の立場がじつに強い！ 思春期の男女関係はいうに及ばず、家庭生活においても女性の主導権は明らかである。マッチョな男性中心主義など、どこを探しても見つけれない。もちろん、政財界ともほとんど男性が指導的地位を占めるのだが、その内情は興味深いものである。



# エチオピア文字で名前を書く ①

柘植 洋一 (つげよういち)  
金沢大学教員

エチオピア文字は、アフリカ北東部のアムハラ語(エチオピア)およびティグリニア語(エチオピア、エリトリア)の表記に使われている。本来はこの地域に話されていたゲズ語(今は死語)表記のために生まれた文字で、四世紀には、それまでのアルファベットから母音がついた音節文字に変わり、その基本的組織、字形が確立した。このようにアフリカにはめずらしく古くから使われてきた文字であるが、一般の人にはなかなか行き渡らず、エチオピアの識字率は一九七〇年代初頭には一〇パーセントに満たなかった。しかし、その後大規模な識字キャンペーンが展開され、現在ではかなりの向上をみている。私が最初にエチオピアを訪れた一九八〇年は、この運動の真最中で、大人も年寄りも識字学級に通い、一生懸命文字を学ぶ姿が見られたことを思い出す。

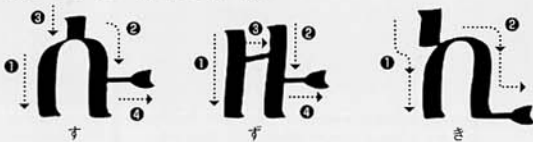
エチオピア文字は、原則的に日本語のカナと同様、音節文字である。音節文字とは、たとえば「カ」のように、ローマ字では子音k+母音aの2字になる音文字であらわす文字である。ただ、アムハラ語の方が日本語よりも子音も母音も数が多いので、文字の総数は二〇〇以上と、カナよりも多くなる。字形は大文字と小文字の区別はないし、アラビア文字のように単語のなかでの位置によって変わることもない。日本語の五〇音図と同じく、エチオピア文字表も

エチオピア文字による50音図

	ア段	イ段	ウ段	エ段	オ段
ア行	አ ለ	አ ስ	አ ሀ	አ ሎ	አ ላ
カ行	ካ ከ	ካ ከ	ካ ከ	ካ ከ	ካ ከ
サ行	ሳ ሰ	ሳ ሰ	ሳ ሰ	ሳ ሰ	ሳ ሰ
タ行	ተ ተ	ተ ተ	ተ ተ	ተ ተ	ተ ተ
ナ行	ና ነ	ና ነ	ና ነ	ና ነ	ና ነ
ハ行	ሃ ከ	ሃ ከ	ሃ ከ	ሃ ከ	ሃ ከ
マ行	ማ ማ	ማ ማ	ማ ማ	ማ ማ	ማ ማ
ヤ行	ያ ሃ		ያ ሃ		ያ ሃ
ラ行	ራ ራ	ራ ራ	ራ ራ	ራ ራ	ራ ራ
ワ、ン	ዋ ዋ				ዋ ዋ
ガ行	ገ ገ	ገ ገ	ገ ገ	ገ ገ	ገ ገ
ザ行	ዘ ሃ	ዘ ሃ	ዘ ሃ	ዘ ሃ	ዘ ሃ
ダ行	ደ ሃ			ደ ሃ	ደ ሃ
バ行	ባ ሃ	ባ ሃ	ባ ሃ	ባ ሃ	ባ ሃ
パ行	ፆ ሃ	ፆ ሃ	ፆ ሃ	ፆ ሃ	ፆ ሃ

例1  
① ከ kā ② ከ- ku ③ ከ ከ ki ④ ከ ከ ka ⑤ ከ ከ ke ⑥ ከ ከ ka/k ⑦ ከ ከ ko

例2 エチオピア語の書き順 鈴木



例3  
花子 山田  
ሃናኮ ያማዳ  
真吾 江端  
ሺንሃ ኤባታ  
幸代 岡田  
ሳዢዮ ኦካዳ

横が母音、縦が子音で構成される。カ行を例にとりて示してみよう(例1)。母音の配列はa・u・i・e・o・oとなつている。六番目の文字は、kaのほかに、母音を伴わない子音kだけの表記の役割も果たす。初めて知らない文字に接したので、ヘンテコな記号が並んでいると思われるだろうが、よく字形を眺めていただきたい。同じ行に属する文字は基本的に共通した字形であることにすぐ気がつかれるだろう。つまり①が基本形で、それ以外は①に右に小さい横棒をつけたり、右を伸ばしたりといった方法で手を加えてきた文字なのである。この方法はだいたいどの大きくけこのように字形間に共通点がないことを考えれば、規則性があるエチオピア文字の方が覚えやすいかもしれない。



聖セシニオスをたたえ、病氣治癒を祈る。牛皮紙の巻物(民博中国コレクションより、C942365411)

さて、日本語のア、イ、ウ、エ、オに対してはそれぞれこの発音に近い④、③、②、⑤、⑦の字形をあてればよい。このようにして五〇音図を作ると図のようになる。なお、エチオピア文字で日本語を書くには、カナのそれぞれに対応するエチオピア文字をそのまま左から右へと並べればよい。

例2・3では日本人の姓名と書き順を紹介した。ところで、エチオピア人の人名は名字+個人名ではなく、自分の名+父親の名という構造をもつ。偉大なマランランナーであったアベベ・ビキラは、アベベが自分の名前、ビキラはお父さんの名前である。女性ランナーのファトウマ・ロバもロバさんではなく、ファトウマさんとはばななければならぬ。したがって、みなさんがエチオピア人に名乗るときは注意が必要である。ヤマダ・ハナコと名乗れば、相手は「ああこの人はヤマダさんで、お父さんはハナコさんか」と思うし、ハナコ・ヤマダといえは「ああこの人はハナコさんで、お父さんはヤマダさんか」ととられることになる。今回は拗音などの場合の書き方を学ぶ。



トルカッキとよばれるワカメ岩掃除。ワカメの胞子が付着しやすいうちに、ほかの海藻を削り落とす



引き潮のときは陸地。満ち潮のときは海となるワカメ漁場



春になると、海女が採ってきたワカメを乾燥台に並べて干す



乾燥ワカメ。この大きさのものを大番(デクァク)という



干し具合を見て、乾燥にむらがないように手入れをする



10世紀初めごろ、蔚山地方の豪族に高麗の太祖がワカメ岩を下賜したことを記す両班岩の碑



干しワカメを供えた産神膳。産婦は産後3週間ワカメ汁を食べ続ける

# ワカメ漁場と海女の暮らし

李善愛  
いそんえ  
宮崎公立大学助教

## 韓国の暮らしの必需品

ワカメは韓国語で「ヨク」という。一二三三年に宋の使者、徐兢が編纂した見聞録「高麗図経」には、「ワカメは身分の貴賤にかかわらず、好んで食されている」と記されている。現在も大量に消費されていて、干しワカメは、産神膳の供物として欠かせない。また、産婦が汁にして食べ

ると、乳の出がよくなるといわれ、お産の準備物としても必需品である。さらに、韓国人は誕生日にワカメ汁を食べないと福に恵まれないといわれる。また、ワカメがぬるぬるしているところから試験に落ちたり、解雇されたりしたとき、「ワカメ汁を食べた」という。このように韓国では、ワカメといえば自動的に誕生日、産後の肥立ち、試験を連想する。

ワカメの生息条件、村の立地条件、社会、経済変化などによって村固有のワカメ漁場利用の慣行が形成されてきた。しかし、こうした漁場慣行は、村外の人や都会の人にはほとんど知られていない。リゾート観光地、工業団地建設などによる開発により、ワカメ漁場の面積はだんだん少なくなっており、天然ワカメの生産量も減りつつある。

## くじびきで決まる岩の主

毎年、誕生日になると母親から国際電話がかかってくる。

「今日はあなたの誕生日だからワカメ汁を食べなさい」

そのころ韓国では、ワカメ漁場であるワカメ岩の掃除がおこなわれている。

韓国の東海岸に位置する蔚山市内から、バスで四〇分ほどかけて峠を越え、南北に広がる集落の真ん中にある「漁村契事務所」に着く。漁村契とは、村の共同漁場を管理する漁業組織のことである。旧暦の八月一日、漁村契員一六〇人が集まり、ワカメ漁場の区画割り当てのために、みな真剣な顔でくじびきに臨む。岩の大きさ、ワカメの収穫量に合わせて人数配分をし、くじびきで一年間の岩の主が決まるのだ。くじに外れた人は大きなため息をつき、がつかりする。岩の主は同じ漁村契員の海女たちにワカメ漁場を売ったり、岩掃除や翌年のワカメ採

取を頼んだりする。また、新しい岩の主は昨年岩の主から、自分の岩の境界を覚えてもらう。そして天気がよく、潮の流れのよい秋の日を選んで岩を掃除する。

一般的に、漁業は男性主体の活動だが、東アジアでは古くから女性が潜水漁に携わっている。特に韓国では、濟州島を中心に、二ヨとよばれる海女の活躍がめざましく、日本へも出稼ぎにきているほどである。

春になると、海女たちは海でワカメを採り、岸では海女の家族がリヤカーなどをもちて収穫を待っている。集落の広場では、海女たちが採ってきたワカメを乾燥台に並べて干す。ワカメは天日によくさらして色が黒いものがよい品とされる。日当たりや風通しが悪いときに乾燥させた赤いものは商品価値が半減する。そのため、ワカメの採取は一週間の天気予報をみてからおこなう。気温が高すぎると、表面は乾燥していても裏は乾燥せず腐ってしまう。風がないとなかなか乾燥しないので、北西風が吹くときを選んで

## ワカメ

(学名: *Undaria pinnatifida*)

ワカメは、低潮線付近から漸深帯(2~5m)の岩礁に着生している1年生植物で、日本や韓国、中国沿岸に分布している。ワカメの胞子葉から出た遊走子は岩などに付着して芽を出し、糸状に発育していく。夏を越し、秋になると糸状の体の細胞のいくつかは、生殖器官にかわり、卵と精子ができはじめる。精子は泳いで卵にくっついて受精する。受精卵は細胞分裂を繰り返して、水温が20度まで下がる秋ごろ、肉眼で見られる幼体に発育してくる。そして冬のあいだに生長したワカメを3月から5月に採取する。

写真提供: 株式会社セブンフォト



トルカッキとよばれるワカメ岩掃除。ワカメの胞子が付着しやすいうちに、ほかの海藻を削り落とす



引き潮のときは陸地。満ち潮のときは海となるワカメ漁場



春になると、海女が採ってきたワカメを乾燥台に並べて干す



乾燥ワカメ。この大きさのものを大番(デクァク)という



干し具合を見て、乾燥にむらがないように手入れをする



10世紀初めごろ、蔚山地方の豪族に高麗の太祖がワカメ岩を下賜したことを記す両班岩の碑



干しワカメを供えた産神膳。産婦は産後3週間ワカメ汁を食べ続ける

# ワカメ漁場と海女の暮らし

李善愛  
いそんえ

宮崎公立大学助教授

## 韓国の暮らしの必需品

ワカメは韓国語で「ヨク」という。一・二・三年に宋の使者、徐兢が編纂した見聞録「高麗図経」には、「ワカメは身分の貴賤にかかわらず、好んで食されている」と記されている。現在も大量に消費されていて、干しワカメは、産神膳の供物として欠かせない。また、産婦が汁にして食べ

ると、乳の出がよくになるといわれ、お産の準備物としても必需品である。さらに、韓国人は誕生日にワカメ汁を食べないと福に恵まれないといわれる。また、ワカメがぬるぬるしているところから試験に落ちたり、解雇されたりしたとき、「ワカメ汁を食べた」という。このように韓国では、ワカメといえば自動的に誕生日、産後の肥立ち、試験を連想する。

ワカメの生息条件、村の立地条件、社会、経済変化などによって村固有のワカメ漁場利用の慣行が形成されてきた。しかし、こうした漁場慣行は、村外の人や都会の人にはほとんど知られていない。リゾート観光地、工業団地建設などによる開発により、ワカメ漁場の面積はだんだん少なくなっており、天然ワカメの生産量も減りつつある。

## くじびきで決まる岩の主

毎年、誕生日になると母親から国際電話がかかってくる。

「今日はあなたの誕生日だからワカメ汁を食べなさい」

そのころ韓国では、ワカメ漁場であるワカメ岩の掃除がおこなわれている。

韓国の東海岸に位置する蔚山(ウサン)市内から、バスで四〇分ほどかけて峠を越え、南北に広がる集落の真ん中にある「漁村契事務所」に着く。漁村契とは、村の共同漁場を管理する漁業組織のことである。旧暦の八月一日、漁村契員一六〇人が集まり、ワカメ漁場の区画割り当てのために、みな真剣な顔でくじびきに臨む。岩の大きさ、ワカメの収穫量に合わせて人数配分をし、くじびきで一年間の岩の主が決まるのだ。くじに外れた人は大きなため息をつき、がつかりする。岩の主は同じ漁村契員の海女たちにワカメ漁場を売ったり、岩掃除や翌年のワカメ採

取を頼んだりする。また、新しい岩の主は昨年岩の主から、自分の岩の境界を覚えてもらう。そして天気がよく、潮の流れのよい秋の日を選んで岩を掃除する。

一般的に、漁業は男性主体の活動だが、東アジアでは古くから女性が潜水漁に携わっている。特に韓国では、済州島を中心に、二・三とよばれる海女の活躍がめざましく、日本へも出稼ぎにきているほどである。

春になると、海女たちは海でワカメを採り、岸では海女の家族がリヤカーなどをもちて収穫を待っている。集落の広場では、海女たちが採ってきたワカメを乾燥台に並べて干す。ワカメは天日によくさらして色が黒いものがよい品とされる。日当たりや風通しが悪いときに乾燥させた赤いものは商品価値が半減する。そのため、ワカメの採取は一週間の天気予報をみてからおこなう。気温が高すぎると、表面は乾燥していても裏は乾燥せず腐ってしまう。風がないとなかなか乾燥しないので、北西風が吹くときを選んで

## ワカメ

(学名: *Undaria pinnatifida*)

ワカメは、低潮線付近から水深帯(2~5m)の岩礁に着生している1年生植物で、日本や韓国、中国沿岸に分布している。ワカメの胞子葉から出た遊走子は岩などに付着して芽を出し、糸状に発育していく。夏を越し、秋になると糸状の体の細胞のいくつかは、生殖器官にかわり、卵と精子ができはじめる。精子は泳いで卵にくっついて受精する。受精卵は細胞分裂を繰り返して、水温が20度まで下がる秋ごろ、肉眼で見られる幼体に発育してくる。そして冬のあいだに生長したワカメを3月から5月に採取する。

で採取し、三、四日間天日にさらす。そのため、年に二、三回しか漁には出られない。干しワカメは海女の家族や親戚のネットワークを通して、一キロ一〇万ウォン(約一万円)以上の高値で売られる。特に九〇年代以後、健康ブームにのって、養殖ワカメの大量生産で沈滞していた天然ワカメの商品価値が高まりつつある。

カナダのモンリオールは、北アメリカにありながらフランス系カナダ人が多数を占める独特の雰囲気がある街である。最近、ダウンタウンの目抜き通りであるセント・キャサリン通りを歩くと、イヌイットが道に座り、小銭を乞うている姿をよく目にするようになった。

カナダ・イヌイットの総人口は四万五〇〇〇人あまりであるが、そのうちの約五〇〇〇人が極北の村を離れ、南の都市部に住んでいる。モンリオールのイヌイット人口は推定八〇〇〇人あまりで、大半が女性である。モンリオールのイヌイットのなかには、先住民関連企業や政府



サン・ローラン通りにあるイヌイットが集う「ミッドウェイ」。夕方になると、イヌイットが集まり始める。彼らにとっては、情報交換の場でもある

関連団体で仕事をしている人もいれば、福祉金や失業手当に頼りながら生活をしている人やホームレスの人もいる。このほかに短大や大学の学生や病氣治療のための専門病院に通っている人がいる。

都市在住のイヌイットの女性については、どのような生活を送っているのかほとんど知られていない。ここでは、仕事をもつ女性とホームレスの女性という対照的な生活を紹介しよう。

シエラ（仮名）は、二三歳のイヌイットの女性。彼女は、数年前に短大を卒業し、「ジェームズ湾および北ケベック協定」の補償金を管理・運用するマキウィクというイヌイットの政治・経済団体に事務員として就職した。月収は二四



日中、ダウンタウンの目抜き通りで寝るイヌイットのカップル。人がまわりを通行しているにもかかわらず、熟睡している

### 酒と麻薬と男と女

一方、モンリオールに住むイヌイットの女性の大半は無職である。しかも飲酒や麻薬の問題を抱えている人が多い。ホームレスの女性も少なくない。

リジー（仮名）は、ウングア湾地域出身の三五歳の女性である。彼女はフランス系カナダ人と結婚し、二児をもうけたが、彼女の飲酒が原因で一〇カ月前に離婚した。子どもは前夫が引き取った。それ以来、彼女はホームレスとなり、街頭で通行人から小銭を乞う日々を送っている。一日五カナダドル以上の稼ぎになるが、これだけでは食べていけないから、先住民友好センターや女性用シェルター（一時的な緊急避難施設）で無料の昼食を、先住民女性専用のシェルターなどで無料の夕食をとることが多い。当然ながら、カリブーの肉といったイヌイット料理を食べる機会はほとんどない。

夜になると公園などの野外で寝ることが多い

が、たまにはシェルターや友人の家に泊まることもある。教会の慈善施設やシェルターに行けば、シャワーを浴びることもできるので、彼女は週に四回はシャワーを浴び、二回は衣服を洗濯する。また、季節の衣服は先住民友好センターや女性用シェルターでもらうことができる。このように住む場所がないことや、雨風や冬の寒さに耐えなければならぬということを除けば、衣食はなんとかなる。

月に一度、前夫は子どもたちを彼女に会わせるために、待ち合わせの場所である先住民友好センターにやってくる。子どもと過ごすことができるこの数時間だけが彼女にとっての生きがいだ。子どもたちと一緒に住むことができない今、彼女は故郷に戻ることを考えているが、この前起こした喧嘩の裁判が続いており、街を離れることはできない。彼女にとって、モンリオールは地獄のようなところだ。

彼女の地獄は、酒や麻薬からはじまった。今も毎日、ビールを飲んでいる。また、大麻もやっている。朝から公園で紙袋に隠したビールの大瓶を仲間と回し飲みをすることもあれば、友人のアパートで明け方までドッチャン騒ぎをすることもある。彼女らは金を出し合っただけで金がなくならないで済む。バーでは金がなくとも男性客がビールをふるまってくれるから、酒を欠かすことはない。酔ったあけくけんかをしたり、路上やバス、地下鉄のなかで大声でわめいたりするため、地元住民からは嫌われがちだ。彼女自身もよくない生活であるとわかつてはいるが、抜け出せないでいる。また、イヌイットの女性のなかには、ビールや大麻を手に入れる金欲しさに売春をする者もいる。彼女らは、心が純粋な分だけ、だまされることも多い。

### 都会のチャンスと危険

極北の村で生まれたイヌイットの女性は、仕事のため、勉学のため、病氣治療のため、夫やボーイフレンドに同行するため、家庭内暴力や性的虐待から逃れるためなどといったさまざまな理由で、モンリオールをはじめとする都市部へと移住する。そして移住して一カ月もたたないうちに勝ち組と負け組に別れ、負け組は底なしの貧困のなかであえぎ苦しむ生活を余儀なくさせられる。また、勝ち組であった女性が、酒や麻薬、離婚などを契機として負け組に転落することもある。その逆は、きわめて少ない。

モンリオールのような大都市は、少数の勝ち組のイヌイットを作り出す一方で、数多くの酔いどれ天使を作り出す。イヌイットの女性にとつて異郷の未知なる大都市は、チャンスと危険にみちた場所といえよう。現在、私は都市イヌイットのコミュニティ開発に関する応用的な研究に従事している。



リタ・ノベリンガ。彼女は、カティヴィク教育委員会のモンリオール事務所にて20年以上勤め、事務局長を務めた。2005年秋に北ケベック生活連合(FCNQ)の代表取締役会長に就任。勝ち組の一人



モンリオールの先住民友好センターを訪れたイヌイットの女性たち。彼女らは、美しいが、明るく力強い



モンリオールの先住民友好センター。モンリオール地区に住む先住民にさまざまなサービスを提供している。ダウンタウンに住むイヌイットやホームレスのイヌイットの多くは、朝から夕方までインターネットやおしゃべりしながら過ごす

# モンリオールの酔いどれ天使



岸上 伸啓  
(きしがみ のぶひろ)  
先端人類科学研究部

## 編集後記

ドイツの「ゲブルツハウス」(「産みの家」)で出産するという体験をした。助産師数人と2人の医師が所属する産院で、妊娠中は医師のみならず、全員の助産師による検診を順ぐりに受けておいた。

いよいよ産気づくと、当直の助産師に電話をする。その晩の担当は、ゴム靴のように元気なコニーさん。「お風呂でも入れよっか」と彼女はてきぱきと準備してくれた。陣痛を和らげるらしいが、追い炊き機能がないため湯は次第に冷たくなる。痛みは増すばかり。ようやくコニーと夫にかかえられ、ベッドわきの腰掛までたどり着く。ここには分娩台なんてものはない。いきむこと数分、黒々とした毛が肩にびっちりとはえた赤ん坊が生まれてきた。「ねずみちゃん!」というコニーの言葉に、一瞬、動物を産み落としたのかと動揺した。黒い体毛はめずらしかつたらしい。医師は数十分ほど前によびだされ、朝市の買い物かごをもったまま駆けつけてきていた。母子ともに無事なことを確認すると、帰っていった。

3時間ほど休んだころ、シャワーを浴びさせられ、さっさと家に帰られる。しかし、産後10日間、コニーは毎日往診に来て、赤ん坊の世話の仕方も教えてくれた。産湯にオイルと生クリームをどほどぼ入れるのには、さすがに戸惑ったものである。

今回の特集が生まれるきっかけとなったのは、単純にもこんな実体験である。だが「産む」がはらむ問題はじつに複雑で、その淵の底には生き残りをかけた人類の情念を湛えている。

最後になるが、共同研究メンバーをご紹介いただいたり、研究会に参加させていただくなどご協力くださった松岡悦子、中村和恵両氏に感謝する。

(山中由里子)